

『後撰集』の贈答歌の虚構性について

— 私家集・歌物語との比較を手掛かりに —

北原 圭一郎

序

『後撰集』には、二首以上で一組となつてゐる贈答歌が一八五組採録されており、他の勅撰集を圧倒するその数量は、貴族社会における日常の歌を中心に採録しようとする『後撰集』特有の撰集方針の一つの現れと考えられている。そのため、『後撰集』が当時の贈答歌の実態、即ち贈歌・答歌の一般的な詠み方や、詠歌状況・人間関係による詠み方の差異などを把握するために必須の資料となり得ることは確かである。

しかし、他の勅撰集に比してより日常に近い贈答歌を多く収めているとはいえ、『後撰集』が現実には詠み交わされた当時の贈答歌の実態をありのまま伝えてゐるには限らな

い。そのような『後撰集』の贈答歌の資料的性格を考える手掛かりとなるのが、他の歌集や歌物語における共通歌との関係である。それらの共通歌については個々の作品に即して研究が進められ、影響関係の有無や前後関係などが論じられているが、本稿ではそのうち贈答歌中の共通歌に絞つて考察を行う。

『後撰集』の贈答歌一八五組のうち、贈歌・答歌の一方もしくは両方が他の歌集・歌物語にも採録されている例は、八七組ある。本稿末尾に、同じ組み合わせで載る場合、どちらか一首のみ載る場合、異なる組み合わせで載る場合などに分けて整理した一覧を示した^①。本稿では更にこの中で、『後撰集』と私家集・歌物語との間に、贈答歌としての形態の異同がある例や、贈答歌としての対応に関わる本文

異同がある例を取り上げ、『後撰集』が採録した贈答歌に私家集・歌物語と異なる一定の傾向が見られることを明らかにする⁽³⁾。またそのような異同は、一方が他方をもとにして作為を加えることで生じた可能性も否定できないこと、ゆえに『後撰集』の贈答歌が実際に交わされたありのままの形であるとは限らないことも示す。

以下、私家集等では贈答関係にない二首が『後撰集』で贈答歌になっている場合、私家集等では三首以上連続する贈答歌が『後撰集』で二首のみの贈答歌になっている場合、『後撰集』と私家集等で二首の対応に関わる歌本文の異同が見られる場合について検討する。

一、私家集・歌物語で贈答関係にない二首

贈答歌に関わる最も顕著な異同として、『後撰集』では贈答歌になっている二首が、私家集・歌物語では贈歌・答歌の関係になっていない（単独の一首もしくは別の歌と贈答関係になっている）という例が挙げられる。本節では、その異同が特に多く見られる『伊勢集』との共通歌を取り上げる。

(1) 『後撰集』

舟にて物へまかりける人につかはしける（伊勢）

A おくれずぞ心にのりてこがるべき浪に求めよ舟見えずとも

返し よみ人しらず

B 舟なくは天の河まで求めてむこぎつつ潮の中に消えずは

舟にて物へまかりける人

C かねてより涙ぞ袖をうち濡らすうかべる舟に乗らむと

思へば

返し 伊勢

D おさへつつ我は袖にぞせきとむる舟越す潮になさじと

思へば（離別・1345—1346／1347—1348）

・『伊勢集』I

友達なる女の筑紫へ行くとて

D おさへつつ我は袖にぞせきとむる舟越す潮になさじと

思へば

返し

A おくれずぞ心に乗りてこがるべき我は涙をうみになし

つつ（157—158）

『後撰集』では、A—BとC—Dは別の二組の贈答歌として並んでいるのに対して、『伊勢集』では、『後撰集』二組目の伊勢の返歌Dが友人の贈歌として、一組目の伊勢の贈

歌Aが伊勢の返歌として（但し下句は異なる）組み合わせられている。

以下、DとAについて両集を比較する。まずDは、『後撰集』では見送る側の歌であり、贈歌Cが出立の悲しみの涙で「袖をうち濡らす」と詠んだのに対して、私の方では涙で舟を沈めないよう「袖にぞせきとむる」と詠み、より誇張した表現で悲しみを表現した返歌として解釈できる。一方、『伊勢集』では、旅立つ者自身が船路の悲しみを詠んだ歌として成り立っている。次にAは、『後撰集』では旅立つ友人への恋焦がれる思いを詠んだ贈歌であり、「舟見えすともし」という表現も返歌Bの「舟なくは」に照応する。一方『伊勢集』では、旅立つ友人への歌である点は同じだがDへの返歌となっており、「我は涙をうみになしつづ」がDの「我は袖にぞせきとむる」と涙の程度を詠んだ表現として照応する。つまり、Aの下句がそれぞれの贈答歌に相応しい表現をとっていることで、『後撰集』『伊勢集』いずれも贈答歌として不備なく成立していることになる。

このような異同が生じている要因としては、特定するのは困難であるものの、様々な可能性が想定される。かつて自分が詠んだ歌や友から贈られた歌を言葉を変えつつ再度用いるなど、実際に二度異なる状況で詠まれた可能性もあ

る一方、⁽⁵⁾ 近接した配列の中で異同が生じていることから考えると、原資料の段階や歌集編纂段階などにおいて、一方の贈答歌に故意もしくは錯誤により手が加わることで別の贈答歌が成立したという、伝来・編纂過程での事情も想定し得る。具体的には、『伊勢集』のD-Aが先にあつて、それが切り離され別の歌と組み合わせられて『後撰集』に採られたという経緯、或いは逆に、『後撰集』の贈答歌四首が先にあつて、そのうち二首を組み合わせるそれに伴いAの下句もDへの返歌として相応しい表現に改められていったという経緯などが考えられる。

このように、『伊勢集』において贈答歌でない二首が『後撰集』では贈答歌になっている場合、『伊勢集』でその二首は近接して配列されている場合が多いという特徴がある。次の二例は、『伊勢集』で隣り合っている別の歌が、『後撰集』で贈答歌になっている場合である。『伊勢集』I類本の本文のみ掲げておく。

(2) 人のはらから亡くなりたる、とぶらふとて

Eうべもなく誰も後れぬ身なれどもとまるはゆくをあはれとや見し

返し

Fそむかれぬ松の千歳のほどよりはとともどもとたみしは

れそせし⁶⁾

Gともどもと慕ふ涙の川水はいかなる色かして流れけむ

(285—286、287)

(3) こくはを

H紅の涙し濃くは緑色の袖もみちても見えましものを

I 紅に涙うつると聞きしをばなどいつはり和我思ひけむ

(280、281)

(2)については、『伊勢集』I類本ではFがEに対する返歌になっており、F・Gの二首は贈答歌になっていないが、『後撰集』ではF—Gが贈答歌として採録されている(1320—1321)。(3)については、『伊勢集』I類本ではHが「こくは」

を詠み込んだ物名歌、Iは別の歌となっているが、『後撰集』ではI—Hの順で贈答歌として採録されている(811—812)。

これらについても異同が生じた要因は特定し得ないが、一方の贈答歌に手が加わることで他方の贈答歌が生じたという直接の影響関係も想定できる。例えば、『後撰集』やその原資料が、『伊勢集』のような形態の資料をもとにして、共通する語句を有する連続した二首を贈答歌として組み合わせた場合などである。なお、私家集の諸本間においても、ある伝本で隣接している独立した二首が別の伝本で贈答歌になっているという例が見られることから、そのような

作為もしくは誤謬が起り得るものであったことが分かる。

以上、本節では、『伊勢集』を例として、『後撰集』と私家集等で贈答歌の形態が異なる場合、近接した配列の中で異同が生じていることがあること、それゆえ一方が他方を元にしつつ手を加えた可能性、即ちどちらかは現実に詠み交わされた贈答歌から改変を経たものである可能性もあることを示した。両集のうちどちらが実態に近いか、或いはどちらも虚構であるのかなど、見極めることは困難であるが、少なくとも『後撰集』の贈答歌が、当時実際に詠まれたそのままの形であるとは限らないことが確認できる。

二、私家集・歌物語で三首以上連続する贈答歌

『後撰集』には、三首以上続く贈答歌が七組収められており、その点も他の勅撰集とは異なる特徴として指摘されている。しかし、贈答歌数全体に比して考えればわずかな数でしかなく、二首一組を贈答歌の基本とする志向は他の勅撰集と同じく強いということができよう。その志向は、私家集・歌物語では三首以上連続している贈答歌のうち二首のみが『後撰集』で贈答歌になっている例が複数見られることからもうかがえる。本節ではこのような異同を

(1) 取り上げ、『後撰集』が採録している二首の傾向を分析する。

・『後撰集』

男のもとにつかはしける

中務

Aはかなくて同じ心になりにしを思ふがごとは思ふらん

やぞ

返し

源信明

Bわびしさを同じ心と聞くからに我が身を棄てて君ぞか

なしき

(恋一・594—595)

・『中務集』 I

正月まゆみの紅葉につけて、大納言

時雨をば待ちもつけでや山の端のおのれまだきにもみ

ちぞめけむ

返し

待ちかねてうつろふ枝のあたりには人に知られぬ秋や

来ぬらむ

また、人

君恋ふる涙も袖にも漏りぬれば我より他に人や知るら

む

返し

我恋ふる涙ながらも身に添ひてうしろめたくも知らず

なるかな

又、人

身の上も人の心も知らぬ間はことごとみなきねをのみ

ぞなく

返し

君だにもことごと知らぬ涙をばいかに知りてかあはれ

と思はむ

また、人

Aはかなくて同じ心になりにしを思ふがごとく思ふらん

やぞ

返し

Bわびしさを同じ心と聞くからに我が身を棄てて君ぞか

なしき

また、人

沢水の心を知れる君なれば常よりまさる今日を知らま

し

返し

まさるらん汀のほども知らねども淀の浜辺ぞ思ひ出で

つる

『後撰集』ではA—B二首のみで完結する贈答歌として

採録されているのに対して、『中務集』 Iではその二首は、

(160—169)

十首連続する贈答歌の中の一部になっている。まず、『後撰集』では中務の贈歌と信明の返歌になっているが、贈歌では「同じ心」を恋心の意味で逢瀬をも暗示する表現として用いたのに対し、返歌では同じように思い悩んでいる心という意味にずらし、更に「心」が同じということの連想から「身」を捨てるといふ表現を導く工夫も見られ、機智的な掛け合いとして成り立っている。一方、『中務集』Iでは男女の順が逆で、A—Bは大納言の贈歌と中務の返歌となっており、各線で示したように「知る・知らず」などの共有語を連鎖させていく一連の贈答歌の中の一部という位置づけである。内容としては、「我が身を棄てて君ぞかなしき」は贈歌以上に積極的な愛情表現であり、愛情を疑う女の贈歌に対する男の慰めの返歌とする方が相応しいように思われるが、男から交互に続いている贈答歌であり、II類本でも男女の順は同じであるため、校訂するには問題がある。

この場合、先後関係としては、『後撰集』のような形態の贈答歌が先にある、類似の表現を持つ贈答歌を連続させることで『中務集』の贈答歌が生じた可能性もあるが、逆に『中務集』のような形態の贈答歌が先にある、一連の贈答歌から二首のみを切り出すことで『後撰集』の贈答歌が生じた可能性の方が高いと考えられる。但しいずれにしても、

でも、贈歌の表現内容の転換や、贈歌から連想される語の利用といった、特に常套的な返歌の技巧が見られる二首が『後撰集』に採録されており、男女の掛け合いの順番としても『後撰集』の方がより自然な形になっていることを確認しておきたい。

この他にも(1)と同様に、私家集等では三首以上連続する贈答歌の中の二首だけが『後撰集』に採録されている例として、『後撰集』恋五・950—951と『実頼集』I・43—46、『後撰集』恋三・753—754と『師輔集』30—34、『後撰集』哀傷・1394—1395と『伊勢集』I・447—450などがあり、一組の贈答歌として完結した、最も対応の整った箇所を『後撰集』が採録している傾向が見られる。

また次の例は、(1)とは異なり、一連の贈答歌のうち直接連続していない二首を『後撰集』が贈答歌として採録している例である。

(2) ・『後撰集』

題しらず

平定文

C 我のみや燃えて消えなん世とともに思ひもならぬ富士の嶺のごと

返し

紀乳母

D 富士の嶺の燃えわたるともいかがせむ消ちこそ知らぬ
水ならぬ身は (恋二・647—648)

・『平中物語』

C (男) 我のみや燃えてかへらむよとともに思ひもならぬ
富士の嶺のごと

X (女) 富士の嶺のならぬ思ひも燃えれば燃え神だに消たぬ
むむなし煙を

Y (男) 神よりも君は消たなむたれによりなままし身の
燃ゆる思ひぞ

D (女) かれぬ身を燃ゆと聞くともいかがせむ消ちこそ
知らぬ水ならぬ身は (一二段)

『後撰集』の贈答歌は、贈歌がくすぶる富士山の火に成就しない自分の思いを喩えたのに対し、返歌はその「燃ゆ」という表現を逆手に取り、「水」(「見つ」を掛ける)でない以上あなたの思いを消すことは出来ないと言んだ内容である。一方、『平中物語』では、その二首の間に、富士山の火なら神でさえ消すことは出来ないというXと、神ではなくあなたにこそ消してほしいというYを挟み、「燃ゆ・消つ・神」などの表現を共有しつつ連続する四首の贈答歌となっている。

この場合も、異伝が生じている事情としては様々な可能

性があり、『平中物語』やその原資料の側が、『後撰集』の平貞文と紀乳母の贈答歌C—Dを物語として取り入れるにあたってXやYをも取り入れ、四首連続の贈答歌として再構成したという可能性や、逆に『後撰集』やその原資料の側が、『平中物語』の四首の中から二首のみを抜き出し、Cへの返歌として合うようにDの初句を改めた可能性などが考えられる^⑩。いずれにしても、「見つ」という関係でない以上水で思いの火は消せないというDの返歌が、贈答の表現に即した最も機智的な切り返しになっているといえ、(1)と同様に最も贈答歌として整った二首を『後撰集』が採録していることになる。

更に、次の例は、『後撰集』と私家集それぞれが、一連の贈答歌のうちの一部を採録している可能性のある例である。

(3) ・『後撰集』

男のもとより「今は異人あんなれば」と言へりければ、女に代はりて
よみ人しらず
E思はむと頼めし事もあるものを無き名を立ててただに
忘れぬ
返し

F 春日野の飛ぶ火の野守見しものを無きなと言はばつみ
もこそ得れ (恋二・662—663)

・『実頼集』I

元輔、人知れぬ事有りて、女を恨みて

X うきながらさすがにもの悲しきは今は限りと思ふな
りけり

返し、女に代はりて

E 思はむと頼めしことも有るものを無き名は立ててただ
に忘れよ (85—86)

『後撰集』では、Eが今の男の代作の贈歌、Fが元の男の返歌という組み合わせになっている。詞書によれば、Eは「今は別の男がいるようだから」と言つて来た元の男に對して女に代わつて詠んだ歌とある。一方、『実頼集』では、Xが女を恨んで贈つた元輔の贈歌、Eがその女に代わつて詠んだ実頼の返歌という組み合わせになっている。

二つの贈答歌ではEが共通しており、元の男の恨み言に對して「女に代はりて」詠んだ歌という状況も共通している。そこから推測すれば、より長い一連の贈答歌、例えばX・元の男(元輔) ↓ E・今の男(実頼) ↓ F・元の男(元輔)といった順で詠まれた贈答歌が原資料としてあり、そのうち、『実頼集』はXとEを、『後撰集』はEとFを二首の

贈答歌として切り出したことで、こうした異同が生じた可能性が一つとして考えられる。そしてこの場合も、『実頼集』の二首は共有表現を持たないのに対して、『後撰集』の二首は「無きな」を共有し、返歌Fが「名」を「菜」との掛詞に転じることで切り返す形式になっていることに注目される。二人の男の関係性から考えると、共有語がなく内容的にも冷淡な切り返しになっている『実頼集』の贈答歌の方がむしろ相応しいともいえようが、あくまで表面上の対応が緊密で、より技巧的な掛け合いが見られる組み合わせの方を『後撰集』が採録していることになる。

以上、本節では、歌物語・私家集では三首以上の一連の贈答歌になっている一方、『後撰集』はその中の二首を贈答歌として採録しているという異同が多いこと、『後撰集』が特に二首のみで完結する巧みな対応を持つ箇所を採録している傾向にあることを論じた。また、この場合も影響関係の有無や前後関係を確定することは出来ないが、『後撰集』側と私家集・歌物語側のうち一方が他方を元にしつつ作為を加えたり、両集が同じ資料を異なる方法で切り取ることによって異同が生じている可能性もあることを述べた。

三、贈答歌としての対応に関わる本文異同

本節では、『後撰集』と私家集・歌物語に共通している贈答歌の、歌本文の異同について考察する。歌本文の微細な異同は多数見られるが、その中でも、贈答歌としての対応の質に関わる異同があることに注目する。

第一に、私家集・歌物語では単独歌、『後撰集』では贈答歌として採録されている共通歌のうち、贈答歌の対応に関わる異同を持つ例を検討する。この場合、贈答歌の形態である『後撰集』の方が、二首間の表現の一致が多い本文になつている傾向があることを述べる。

(1)

・『後撰集』

小式につかはしける

藤原朝忠朝臣

A時しもあれ花の盛りにつらければ思はぬ山に入りやし
なまし

返し

Bわがために思はぬ山の音にのみ花さかりゆく春をうら
みむ
(春中・70—71)

・『朝忠集』 I

人に

A時しもあれ秋の盛りにつらければ思はぬ山に入りけるかな
(58)

(2)

・『後撰集』

心ざしありながらえあはず侍りける女のもとにつ
かはしける
贈太政大臣

C頃を経てあひ見ぬ時は白玉の涙も春は色まさりけり

返し

伊勢

D人恋ふる涙は春ぞぬるみけるたえぬ思ひのわかすなる

べし

(恋一・545—546)

・『伊勢集』 II

C頃をへてあひみぬ時は白玉の涙も秋は色かはりけり

D人恋ふる涙は春ぞぬるみけるたえぬ思ひのわかすなる

べし

(278、303)

(1)は、『後撰集』では贈答歌、『朝忠集』では贈答単独で採録されている例であるが、『後撰集』では「花」、『朝忠集』では「秋」となっている異同に注目される。『後撰集』の贈答歌は、贈答が時もあるうに「花の盛り」の時期に冷淡だと恨んだのに対し、返歌が「盛り・離り」の掛詞に転換して相手を恨み返した内容である。「秋のさかり」では返歌の「花さかりゆく春」と整合しないため、贈答歌として

は「花」の方が妥当といえよう。但し、「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを」（古今集・哀傷・839・忠岑）などの例があるように、とりわけ別れがつらい季節とされるのは春ではなく秋であり、単独の一首として見ると「秋」の本文の方が妥当であるとも言える。要するに(1)の例では、Aの一首は、贈歌単独である場合、返歌と組である場合それぞれの形態においてより相応しい本文になっている。その理由としては、『朝忠集』が二首のうち贈歌のみを採録する際により妥当な「秋」という本文に改変したのか、逆に『後撰集』が贈答歌として対応関係を整えるために「花」という本文に改変したのか、どちらの可能性も考えられる。

(2)は、『後撰集』では贈答歌、『伊勢集』Ⅱ類本では別々の単独歌として採録されている例で、異同があるのはCの歌である。贈答歌である『後撰集』では、傍線部の本文が、贈歌であるのに相応しく返歌に照応する「春」になっているが、贈答歌ではない『伊勢集』Ⅱ類本では、「秋」になっている。この場合も、贈答歌の組になっている『後撰集』の本文の方が二首の対応がより緊密な形になっていることが確認される。⁽¹⁵⁾

第二に、私家集・歌物語と『後撰集』どちらでも贈答歌

の組で採録されている共通歌のうち、贈答歌の対応に関わる異同を持つ例を検討する。この場合も、『後撰集』の方が二首間の表現の一致が多い本文になっている傾向がある。

(3) 『後撰集』

身のなりいでぬことなど嘆き侍りける頃、紀友則がもとよりいかにぞとひおこせて侍りければ、返事に菊花を折りてつかはしける 藤原忠行

E 枝も葉もうつろふ秋の花見ればはては影なくなりぬべらなり

返し

友則

F しづくもて齢のぶてふ花なれば千代の秋にぞ影はしげらなり (秋下・432—433)

・『友則集』

藤原忠行が身の沈むよし嘆きける、とぶらひにやりける返り事に、菊の花を折りて

E 枝も葉もうつろふ秋の菊みればはては影なくなりぬべらなり

とある返しに

F しづくもて齢のぶてふ花なれば千代の秋にぞ影はみつらなり (60—61)

(4)

・『後撰集』

まからずなりにける女の、人に名立ちければつか
はしける (信明)

G 定めなくあだにちりぬる花よりはときはの松の色をや

は見ぬ

返し

よみ人しらす

H 住吉のわが身なりせば年ふとも松より外の色を見まし

や

(恋二・596―597)

・『中務集』 I

また、人に

G 定めなくあだなるものを見るよりはときはに散らぬ色

をやは見ぬ

返し

H 住の江のわが身なりせば年ふとも松より外の色を見ま

しや

(139―140)

(3)は、『後撰集』と『友則集』どちらも同じ組み合わせの

贈答歌であるが、『後撰集』の方が二首間の語の一致がやや
多くなっている例である。Eの贈歌が、枝葉が枯れて花の
木蔭がなくなる情景に、庇護者がいない不遇の身を重ねて
詠んだのに対し、Fの返歌が、長寿をもたらす「菊」の性

質を利用して将来の栄達を願った内容である。傍線部の
「花」と「菊」は、どちらの本文でも歌の大意に関わらな
い微細な異同だが、贈答歌としての対応の質に関わってお
り、「花」とある『後撰集』の本文の方が返歌との一致がよ
り多くなる。

このような、歌意には関わらないものの贈答歌としての
対応に関わる微細な異同は、他の贈答歌にも見られ、概し
て『後撰集』の方が、二首間の一致が多い傾向にある。¹⁵⁾こ
の場合も、『後撰集』が二首の表現を一致させるために本文
を改めたのか、私家集等が二首間の直接的な一致を避けて
独自の表現に改めたか、二つの可能性があるだろう。

(4)は、男女の順が異なるのに加えて、歌意に関わるやや
大きな異同が見られる贈答歌である。¹⁶⁾まず贈歌Gについて
は、『中務集』の「あだなるもの」「散らぬ色」よりも、『後
撰集』の「あだにちりぬる花」「松の色」の方が、より具
象的であると同時に返歌との対応もより自然なものとなっ
ている。返歌Hについては、『後撰集』の「住吉」であれば
「住み良し」を掛けた表現になるが、『中務集』の「住の江」
では掛詞にならない。内容・表現どちらの点でも『後撰集』
の方が整った贈答歌になっている。

なお、贈答歌の二首の対応に関わる異同という点に関連

することとして、『後撰集』諸本間でもそれに関わる異同が見られる例があることを付け加えておく。

(5) 女のもとより、文月ばかりに言ひおこせて侍りける

よみ人しらず

秋萩を色どる風の吹きぬれば人の心も疑はれけり

返し

在原業平朝臣

秋萩を色どる風は吹きぬとも心はかれじ草葉ならねば

(秋上・223—224)

一般的に底本とされることの多い天福二年本においては、右のように、贈歌・返歌が三句目までほとんど一致する表現になっているが、白川切・堀川本などの古本系統、定家無年号本A類B類などでは、返歌の第三句が「はやくとも」になっており、天福二年本など一部の本のみが特に一致の多い形になっている。定家本に校訂による「発展」が見られることは指摘されており、編纂時点より後の書写・校訂の過程で贈答歌としてより対応する形に整えられていった可能性も示唆する例である。¹⁸なお、先に挙げた例のうち、(1)・(2)は『後撰集』諸本間に異同は無いが、(3)は定家本以外の諸本と定家無年号本A類などでは「菊」¹⁹となっており、(4)も汎清輔本・古本系統の一部では「すみのえの」となっているため、『後撰集』編纂以降に改変された可能性もある。

以上、本節では、『後撰集』と私家集・歌物語との共通歌に贈答歌としての対応に関わる本文異同がある場合、『後撰集』の方が二首の表現の一致が多い本文になっている傾向があること、その理由の一つとして、『後撰集』の編纂段階や書写校訂過程において、贈答歌としてより対応が整うように手を加えられた可能性も考えられることを述べた。『後撰集』の贈答歌に表現の直接的な一致が多い傾向が見られることは既に指摘されており、私家集・歌物語に比べ、『後撰集』の贈答歌に共有語が多いという事実はその傾向を裏付けることにもなる。しかしながら、それは従来指摘されていたように、『後撰集』時代の贈答歌の実態の反映では必ずしもなく、そのような旧来的な対応の贈答歌²⁰をも意図的に多く採録することで再評価しようとする『後撰集』の姿勢であったと考えられる。

結

本稿では、『後撰集』と私家集・歌物語に共通する贈答歌を比較することで、『後撰集』に採録された贈答歌の傾向と、それが当時の贈答歌の実態をそのまま反映したものとは限らないことを明らかにしてきた。第一に、『伊勢集』などの私家集等では贈答関係になっていない近接した二首が『後

撰集』では贈答歌になつてゐる例が多く、配列をもとに作
為が加わつてゐる可能性もあること、第二に、私家集等では
三首以上連続してゐる贈答歌のうち『後撰集』では二首
のみが採録されてゐる例も多く、特に表現の対応や切り返
しの作法の点で巧みな部分の二首が完結した贈答歌として
採録されてゐる傾向にあること、第三に、『後撰集』と私家
集等に共通する贈答歌の歌本文を比較すると、『後撰集』の
方が表現の対応が多い本文になつてゐる傾向にあることな
どを指摘した。

贈歌・答歌で表現を一致させること、贈歌の表現を踏ま
えて切り返すことなど、贈答歌の一般的な方法を『後撰集』
から読み取るにあつて、それが平安貴族社会の日常にお
いて交わされてゐた現実の贈答歌の実態とは限らず、あく
まで『後撰集』がそのような贈答歌を意図的に多く採録し
てゐるといふ側面もあること、時には実際に詠まれたもの
に手を加へること成り立つてゐる虚構の贈答歌も含まれ
てゐる可能性があることは、前提とすべき事実であると思
われる。

※和歌の引用は、私家集は『新編私家集大成』、その他は『新
編国歌大観』によつたが、適宜表記を改めた。

【注】

(1) 佐藤高明「後撰和歌集と私家集との関係についての考察」(後
撰和歌集の研究『日本学術振興会、一九七〇年二月)、関根
慶子「後撰集と伊勢集」(『中古私家集の研究 伊勢・経信
・俊頼の集』風間書房、一九六七年三月、初出一九六一
年三月)など。

(2) 岸上慎二・杉谷寿郎「後撰和歌集」(笠間書院、一九八八年
五月)を参照し、『古今集』『拾遺集』、『伊勢物語』『大和物語』
『平中物語』、及び『新編私家集大成』所収の私家集につい
て整理した。

(3) 三代集間の詠歌状況や作者の異なる重出歌については、各
集の素材や撰集方針の差異を示すものと捉える説が既にあ
る。奥村恒哉「三代集の重出歌とその問題」(『古今集・後
撰集の諸問題』風間書房、一九七一年二月、初出一九五三
年九月)など。

(4) この問題については、拙稿「『古今集』『後撰集』の贈答歌
の方法―贈答歌採録基準の差異を中心に―」(『国語と国文
学』(掲載号未定))で論じた内容と一部重なる。

(5) 『元良親王集』1―4では、同じ贈歌を複数の女性に贈つた
状況が語られてゐる。なお、既にある歌を再度用ゐること
による異伝の発生があり得たことは、片桐洋一「和歌の異

伝―『古今集』『後撰集』の重出歌を中心に―(『古今集以後』笠間書院、二〇〇〇年一〇月、初出一九九一年一〇月)で指摘される。

(6) 四・五句はⅡ・Ⅲ類本から「ともどもとだに」したはれぞせし」に校訂して解釈する。

(7) 『朝忠集』Ⅱ 27・28と『朝忠集』Ⅰ 15―16、『業平集』Ⅱ 69・

70と『業平集』Ⅲ 6―7、『伊勢集』Ⅱ 278・279と『伊勢集』Ⅲ 280―281など。また、『古今集』では贈答歌になっていない、業平と小町の隣接した二首 622・623が、『伊勢物語』二十五段で贈答歌となっており、『伊勢物語』の作為の可能性が指摘されている。

(8) 『中務集』Ⅱでは、Ⅰとはまた一部異なる六首の歌が連続する形式になっている。『信明集』Ⅰ・Ⅱでは歌順、男女の順は『後撰集』と同じで、詞書は「はじめてのつとめてかへりたる、女」とより具体的に記されている。

(9) その場合、Xは『古今集』雑牀・1028に紀乳母の歌として採られていることと関係するかと思われる。但しYの他出は確認できない。

(10) 『後撰集』諸本の中で、定家本系統以外ではDの初句が「かれぬ身の」となっている本が多いため、編纂時より後に改められた可能性もある。同様の例は第三節で挙げる。

(11) 『元輔集』Ⅱには、X↓E↓Fの順で三首の贈答歌が採録されている。但し、『元輔集』Ⅱが原型をとどめているのか、二つの贈答歌を合わせて採録したのかは不明である。

(12) Ⅰ類本では『後撰集』と同じくC―Dの贈答歌となっており、返歌本文は「春」、Ⅲ類本ではCが別の歌への贈歌でDが単独歌になっており、返歌本文は「秋」である。

(13) 他にも、贈答歌ではない私家集や歌物語に比べ、贈答歌である『後撰集』の本文の方が二首間の語句の一致が多くなっている例として、『後撰集』930と『伊勢集』Ⅰ 289、『後撰集』1073と『兼盛集』Ⅰ 10などがある。

(14) 他にも、『後撰集』の方が二首間の語句の一致が多くなっている贈答歌として、『後撰集』978と『大和物語』五六段、『後撰集』1394と『伊勢集』Ⅰ 447、『後撰集』1397と『三条右大臣集』30及び『兼輔集』Ⅰ 114などがある。逆に私家集の贈答歌の方が一致が多くなっている例は少数である。『後撰集』1274と『伊勢集』Ⅰ 295など。

(15) 『中務集』Ⅱには二首とも採録されていない。

(16) 『古今集』『後撰集』や『伊勢物語』の業平歌を抜き出して編纂したとされる『業平集』のうち、ⅠとⅢは「吹きぬとも」、ⅡとⅣは「はやくとも」の本文になっている。

(17) 岸上慎二「後撰集定家本の展開」(『後撰和歌集の研究と資料』

新生社、一九六六年一月、初出一九五六年)

(18) 但し、定家本が平安時代の流布本文として最も古いとする

説(奥村恒哉「平安朝の後撰集」(注3書、初出一九六四年

九月)、定家本の校訂には典拠があるとする説(杉谷寿郎「諸

本の系統とその対立の誘因」『後撰和歌集研究』笠間書院、

一九九一年三月、初出一九七六年五月)もある。

(19) 増田繁夫「贈答歌のからくり」(和歌文学会編『論集 和歌と

レトリック』笠間書院、一九八六年九月)

(20) それが『万葉集』以来の旧来的な贈答歌の形式である事は、

注4拙稿で論じた。

【付記】本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費(DC2)に

よる研究成果の一部である。

恋一	冬	秋下	秋中				秋上		夏	春下	春中	春上	部立									
545 546	510 511	471 474	458 459	432 433	394 395	349 350	288 289	285 286	281 284	279 280	231 232	223 224	211 212	139 140	137 138	135 136	82 83	70 71	51 52	5 6	歌 番 号	
贈太政大臣	元良親王	貫之	枇杷左大臣	藤原忠行	伊勢	枇杷左大臣	中宮宣旨		右大臣	法皇御製			貫之	藤原雅正	貫之	貫之	藤原朝忠				左大臣(実頼)	贈歌詠者
伊勢	藤原かつみ	兼輔	伊勢	紀友則	藤原雅正	伊勢	伊勢	伊勢	大輔	伊勢		在原業平	藤原雅正	貫之	貫之	中務	小式	伊勢			朱雀院	返歌詠者
伊勢集 I 278 279	兼輔集 IV 55 58	伊勢集 I 1 2、II 112、III 112	友則集 60 61	伊勢集 I 471 471、II 383、384	伊勢集 I 346 347、II 348、349、III 349、350	伊勢集 I 135 136	九条右大臣師輔集 87			伊勢集 I 875 876	業平集 I 11 12、II 85、86、大和物語 160	貫之集 I 838 841	貫之集 I 856 857	貫之集 I 856 857	拾遺集 1054	朝忠集 I 58 、II 49	伊勢集 III 305 306、II 304、305				朱雀院集 4 5	贈答歌同じ合わせ
伊勢集 II 278	貫之 II 40、II 90、兼輔集 III 94、III 95				III 247	伊勢集 I 247、II 241、				III 233	伊勢集 I 232、II 233、	貫之集 II 30		貫之集 I 879			伊勢集 III 305					贈歌のみ単独
III 145	伊勢集 II 303、伊勢集				III 241	伊勢集 I 241、II 242、				134	拾遺集 167、伊勢集 II	IV 5	業平集 II 70、業平集				伊勢集 III 306					返歌のみ単独
伊勢集 III 280	元良親王集 I	貫之集 I 817 820																				贈歌が別の返歌と組 合せ
							後撰集 1271、伊勢集 I 295、II 293、III 295			III 235	伊勢集 I 234、II 235、	業平集 III 7										返歌が別の贈歌と組 合せ
										伊勢集 III 133 134												連続する贈答歌の一 部

恋四						恋三						恋二				恋一							
862 863	860 861	838 839	830 831	820 821	818 819	811 812	808 809	759 760	756 757	753 754	751 752	731 732	707 708	701 702	662 663	647 648	640 641	633 634	617 618	596 597	594 595	567 568	
貫之	源善	・	贈太政大臣	伊勢	・	・	贈太政大臣	贈太政大臣	枇杷左大臣	右大臣	伊勢	伊尹	中務	在原元方	・	平定文	中將更衣	貞元のみこ	枇杷左大臣	源信明	中務	・	
・	・	三条右大臣	伊勢	贈太政大臣	伊勢	・	伊勢	伊勢	伊勢	女四の親王	贈太政大臣	小野好古	源信明	・	・	紀乳母	延喜御製	おほつぶね	伊勢	・	源信明	・	
		三条右大臣集19 20	伊勢集Ⅰ10 11、Ⅱ 11、12、Ⅲ10 11	伊勢集Ⅲ362 363	伊勢集Ⅰ260 261、Ⅲ 261、262	伊勢集Ⅱ279 280	伊勢集Ⅰ12 13、Ⅱ 13、14、Ⅲ12 13	伊勢集Ⅲ408 409	伊勢集Ⅰ14 15、Ⅱ 15、16、Ⅲ14 15、業 平集Ⅱ74 75		一条拱政御集6 7	信明集Ⅰ90 91				延喜御集10 11		伊勢集Ⅰ5 6、Ⅱ 5、6	伊勢集Ⅰ5 6、Ⅱ 5、6	56 57	信明集Ⅰ92 93、Ⅲ 93		
673、Ⅲ 22	拾遺集715、 貫之集Ⅰ	古今集491			伊勢集Ⅰ407、 Ⅱ259	伊勢集Ⅰ281		伊勢集Ⅱ459	業平集Ⅲ18、 Ⅳ13	拾遺集650				元方集4								深養父集Ⅰ52	
					伊勢集Ⅱ260	伊勢集Ⅰ280、 Ⅲ282、伊勢集 Ⅱ260	伊勢集Ⅰ480、 Ⅱ469		古今集733		後撰集1067							古今集630、 深養父集 Ⅰ53					
						伊勢集Ⅲ281									Ⅱ77	清慎公実頼集Ⅰ 87、	平中物語ⅠⅠ段						
				伊勢集Ⅱ492													平中物語ⅠⅠ段						
										九条右大臣師輔集 30 31	伊勢集Ⅱ517 519、Ⅲ 404 407			伊勢物語ⅠⅠ段							中務集Ⅰ139 140	中務集Ⅰ166 167、Ⅱ 250 251	

離別				雜四				雜三				雜二		雜一					
1342 1343	1340 1341	1328 1329	1325 1326	1322 1323	1320 1321	1316 1317	1292 1293	1273 1274	1226 1227	1205 1206	1195 1196	1182 1183	1172 1173	1123 1124	1117 1118	1113 1114	1111 1112		
.	贈 太政大臣	.	.	伊勢	.	公忠	.	贈 太政大臣	真延法師	大輔	小野小町	俊子	.	源公忠	七条后	大輔	右大臣		
伊勢	伊勢	.	.	帝	.	女	伊勢	伊勢	右大臣	敦忠	遍照	枇杷左大臣	.	小野好古	伊勢	雅正	庶明		
集Ⅱ 287 288 Ⅲ 289 290	後撰集 929 930 Ⅲ 289 290	263 264 Ⅲ 265 266	伊勢集Ⅰ 263 264 Ⅱ	宗于集 11 12	宗于集 17 18	物語Ⅰ段	勢集Ⅰ 239 240 Ⅲ 239 240 Ⅱ 239	寬平御集 16 17 伊勢集Ⅰ 239 240 Ⅲ 239 240 Ⅱ 239	九条右大臣師輔集 93	38	敦忠集Ⅰ 133 134 朝	物語168段	35 17 18 Ⅱ 54 55 大和	遍照集Ⅰ 17 18 Ⅱ	大和物語68段	31 312 Ⅲ 312 313	伊勢集Ⅰ 312 313 Ⅱ	朝忠集Ⅱ 26 27	九条右大臣師輔集Ⅰ
伊勢集Ⅰ 288					伊勢集Ⅱ 285	公忠集Ⅰ 24 Ⅱ 31		後撰集 933				大和物語57段	Ⅲ 15 大和物語 4段	公忠集Ⅰ 27 Ⅱ 32 大和物語 4段					
伊勢集Ⅰ 289					Ⅲ 288 伊勢集Ⅰ 287 Ⅱ 286 Ⅲ 287		307 拾遺集 1238 伊勢集Ⅲ												
					伊勢集Ⅰ 286 Ⅲ 287			後撰集 286											
																		朝忠集Ⅰ 14 15	

哀傷				慶賀	離別	部立		
1424 1425	1396 1398	1394 1395	1392 1393	1389 1390	1380 1381	1347 1348	1345 1346	歌番号
兼輔	三条右大臣	伊勢	右大臣	三条右大臣	(太政大臣)	・	伊勢	贈歌詠者
貫之	兼輔	・	内侍のかみ	兼輔	今上御製	伊勢	・	返歌詠者
			74 九条右大臣師輔集73		円融院御集4 5			贈答歌同じ組合せ
兼輔集Ⅲ 83、 Ⅳ 102	兼輔集Ⅳ 90	伊勢集Ⅱ 450						贈歌のみ単独
754、 Ⅱ 22	拾遺集 1309、 貫之集Ⅰ							返歌のみ単独
	兼輔集Ⅰ112 114、兼輔集Ⅱ 95、97 98、兼輔集Ⅴ 99・102 103、三条					Ⅲ 162	伊勢集Ⅰ 158、Ⅱ 162、	贈歌が別の返歌と組 合せ
						Ⅲ 161	伊勢集Ⅰ 157、Ⅱ 161、	返歌が別の贈歌と組 合せ
	378 381	伊勢集Ⅰ 447 450、Ⅲ		兼輔集116 117、三条 右大臣集27 2				連続する贈答歌の一 部